

堀田典裕

山

林

都

市

黒谷了太郎の思想とその展開

はじめに

●〈山林都市〉

大正一〇(一九二二)年一〇月七日、『新愛知』紙上に「山林都市」と題された論文が掲載された。執筆者は、当時、都市計画愛知地方委員会・幹事の役職にあった黒谷了太郎(くろたに りょうたろう 一八七四―一九四五)、土族出身の一官吏であった。黒谷の「山林都市」は、R・アンウィン(Raymond Unwin, 1863-1940)に私淑した「田園都市」の理論を、台湾総督府時代に見聞した「山岳都市」に結びつけた独自の「ユートピア」であり、この他にも複数の新聞や雑誌に掲載されて、最終的に単著として出版された。それらの中には、「山林都市」の他に、「森林都市／フォレスト・シティ」あるいは「林間都市」という呼称も見出すことができる。それは、後に「日本型田園都市」と呼ばれるに至ったわが国の「田園都市」の中でも、異彩を放つ存在であったにもかかわらず、発表された当時は、「一向に耳を貸す人がいなかった」ばかりでなく、その後も彼の論文が取り沙汰されることは極めて少ない。

しかしながら、黒谷の論文の後に発表された計画の中には、「山林都市」「森林都市」「林間都市」あるいは「山岳都市」という言葉を用いた複数の事例を見出すことができるのである。しかも、そうした計画の設計者の中には、西山卯三、丹下健三、菊竹清訓、山下和正をはじめとする、わが国を代表する建築家の名前さえ見出すことができる。わが国が、敗戦後に高度経済成長を経て、バブル経済が破綻する道程において、〈山林都市〉という言葉は、現れては消えていく詠み人知らずの「ユートピア」となったのである。

「ニュー・アーバニズム(New Urbanism)」「アーバン・ビレッジ(Urban Village)」「コンパクト・シティ(Compact City)」……、現在、都市と建築にかかわる専門家が新しい都市像を語ろうとするたびに造語された言葉は、まるでファッションのように生まれては消えていく。これに対して〈山林都市〉という言葉は、一世紀近くの間、都市と建築にかかわる専門家の発想を励起する「ユートピア」であり続けてきた。しかも、それらのほとんどの計画が、黒谷の「山林都市」について言及することはなかったばかりか、それぞれが異なる内容を展開していくことになった。黒谷から引き剥がされた〈山林都市〉という言葉だけが、独り歩きすることになったのである。

●〈山林都市〉の永続性

わが国の都市と建築のデザインは、「変化し続けること」を前提として語られることがある。昭和三七（一九六二）年二月、丹下健三と川添登のエッセイと、渡辺義雄の写真によって編まれた『伊勢・日本建築の原形』が出版された（註1）。この著書において、丹下が「日本建築の原型―伊勢」において、「高床」と「棟木」からなる「神明造」という「フォーム」の分析を行うことによって、わが国の伝統の中に現代建築を位置づけようとしてみせたのに対して（註2）、川添は「伊勢文化論」において、「式年遷宮」を「新陳代謝」として捉えることによつて、自らが起こした「メタポリズム運動」を擁護しようとした（註3）。「メタポリズム運動」における「新陳代謝」の理論は、菊竹清訓の「ムーブネット (Move-net)」「ムーバブルハウス (Movable-house)」「ムーバブロック (Mova-block)」からなる「三つの動くもの」によつて、家具―住宅―都市という異なるスケールにおける可動性と可変性に置き換えられたのである。あるいはまた、「メタポリズム運動」と同じ年に発表された丹下健三の「東京計画1960」では、永久的な構造体からなる「メジャー・ストラクチュア」と、可変の住居ユニットからなる「マイナー・ストラクチュア」という都市像が示されているが、これもまた「新陳代謝」のあり方であった（註4）。

実際に、わが国のデザインにおいて「変化しないこと」を探することは、困難を極める作業であり、「変化し続けること」こそが、唯一「変化しないこと」なのかもしれない。しかしながら、こうした考え方は、高度経済成長時代に合致する美学であり、それはP・R・バンハム(Peter Reyner Banham, 1922-1988)の言う「使い捨ての美学」に支えられたものであったが（註5）、低成長時代の現代社会において、これを善しとする者は、もはやどこにもいないであろう。「メタポリズム運動」では、「変化しないこと」である「メジャー・ストラクチュア」と、「変化すること」である「マイナー・ストラクチュア」の両方を一度に創出しようとした。しかしながら、バブル経済の崩壊後に低成長時代に突入するとともに、少子高齢化が進行する今日、高度経済成長期と同様に「メジャー・ストラクチュア」を建設する経済的・空間的余地がどこにあるか。むしろ現在では、「変化しないこと」の骨格(インフラストラクチュア)を探す必要があるのではないだろうか。その際、〈山林都市〉が有する永続性は、そうした「変化しないこと」の骨格にはなり得ないだろうか。本書は、こうした問いに答えようとして書かれたものである。

●〈山林〉と「コンテキスト」

ここで言う「変化しないこと」の骨格を別の言い方で捉えたとすれば、都市と建築にかかわる専門家がしばしば用いる「コンテキスト」という言葉にかかわる事柄を含むものである。「コンテキスト」という概念は、コリン・ロウ(Colin Rowe, 1920-1999)が、一九六三年にコーネル大学大学院に開設した都市デザイン・スタジオで学んだ人々が共有した考え方であった（註6）。T・L・シューマッハー(Thomas L. Schumacher, 1941-)は、一九七一年に「コンテクスチュアリズム…都市の理想形とその変形について」を著し、「コンテクスチュアリズム(Contextualism)」という概念を最初に文字にした（註7）。さらに一九七四年には、S・コーエン(Stewart Cohen, 1942-)は、シューマッハーが打ち立てた概念を補完した。コーエンは、言語学における「統辞論(Syntax)」と「意味論(Semantics)」という考え方を援用することによつて、「物理的コンテキスト／文化的コンテキスト」という論文を著した（註8）。シューマッハーの論文が、「統辞論」としての「物理的コンテキスト (Physical Context)」の理解に傾けられていたのに対して、コーエンはR・A・M・スターン(Robert A. M. Stern, 1939-)が提唱した「インクルーシヴィズム (Inclusivism、包括主義)」を応用することによつて、「意味論」としての「文化的コンテキスト (Cultural Context)」について言及しようとしたのである（註9）。「文化的」⇨「イメージ」とするコーエンの論理展開からすれば、詠み人知らずとなりながらも戦前と戦後を超えて継承されてきた〈山林都市〉は、わが国の「文化的コンテキスト」であると言つて差し支えないであろう。

●〈山谷〉と〈林相〉

さて、コーエンがシューマッハーから引き継いだ「物理的コンテキスト」については、〈山林〉の構成要素にかかわる内容に他ならない。本書では、〈山林〉が、土地の起伏によつて造られた「地形」と、そこに根付いた「森林」という二つの要素から成り立っていると考える。したがつて、本書で取り扱う〈山林〉は、山の姿形を言い表す〈山谷〉と、その山肌を形成する森林の様相を言い表す〈林相〉からなる複眼的視点によつて捉えようと考えた（註10）。こうした〈山谷〉と〈林相〉の関係は、アメリカの知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソン(James Jerome Gibson, 1904-1979)が、「アフオーダンス」を提唱する以前に「直接知覚」を説く際に用いた、「形態」と「肌理」の関係に準えることができるかもしれない（註11）。つまり、〈山谷〉とは〈山林〉の「形態」

註1 参考文献1参照。

註2 参考文献1において、丹下は、伊勢神宮の「唯一神明造」に、「南方的・アニミズム」と「北方的・シャーマニズム」からなる二つの系譜の接点を見出している。つまり、前者の「南方的・アニミズム」では水平的平面的な「高床」が、後者の「北方的・シャーマニズム」では垂直的立体的な「柱」が、それぞれの表象であるという。

しかも、こうした二項対立による思考は、昭和三〇（一九五五）年六月の段階での「ディオニソスのなものとアポロ的なもの」、『弥生的なもの』と『縄文的なもの』という対比にも遡ることができる。参考文献2、p.115-131参照。

註3 参考文献3参照。

註4 参考文献4参照。

註5 参考文献5、p.204-214参照。

註6 コーネル大学におけるロウの弟子は、たとえば、T・L・シューマッハー、F・コッター、S・コーエン、S・ハート、J・M・シュワートイング、B・ケリー、M・ベル等の名前が挙げられている。参考文献6参照。

註7 参考文献7、p.132-153参照。

註8 参考文献7、p.99-131参照。

註9 R・A・M・スターンは、「フライトーン・ビーチ住宅競技設計（一九六八）」におけるウエルズ／ケッターによる「等案と、ヴェンチュリーとローチによる「等案を比較することによって、「より少ないことはより多いことである (Less is more)」なる旧世代や「より少ないことは退屈なことである (Less is bore)」とする新世代の対比を浮き彫りにしようとした。新旧世代間の対比は、「エクスクルーシヴィズム (Exclusivism、排他主義) v s インクルーシヴィズム (Inclusivism、包括主義)」という構図によつて説明されると同時に、「ホワイト派 v スグレイ派」という構図にも展開された。参考文献8参照。

註10 参考文献1において、丹下は「フォーム」という言葉を度々用いており、「具体的な形態の背後にある本質的な形相」としている。なお、丹下によるこの論文には、L・I・カイン(Louis Isadore Kahn, 1901-1974)に於ける「フォーム」やG・ケスシュ(György Kepes, 1906-2001)やK・リンチ(Kevin Lynch, 1918-1984)に於ける「イメージ」、エルンスト・カッシーラー(Ernst Cassirer, 1874-1945)とS・K・ランガー(Susanne Krauth Lange, 1895-1985)に於ける「サイン」と「シンボル(象徴)」を踏まえた「西欧的教養」が下敷きとなったことが指摘されているが、本論文では、丹下が「フォーム」を「形相」と訳出したことを踏まえて、森林の様相を「林相」と呼ぶことにする。参考文献9参照。

註11 参考文献10、p.80参照。

であり、〈林相〉とは〈山林〉の「肌理」であり、両者の関係は、ギブソンが提示した「空中の論理 (Air Theory)」と「地上の論理 (Ground Theory)」からなる複眼的視点に相当するものである(註12)。

●本書の構成

本書では、『山林都市』『山林都市』(〈山林都市〉)という三種類の括弧付きの山林都市が用いられている。これらは、一般的な学術論文の慣例に従うもので、特定の作家による書名と論文名・作品名を表す場合には、『山林都市』と「山林都市」を使用し、本書の主題とする内容を指示する際には、〈山林都市〉を用いている。

本書は、全部で五章からなる構成であり、以下に概要を列挙しておく。

第一章「山林都市」前史」では、近代初頭に見出された〈山谷〉と〈林相〉について概観した後で、〈山林〉を巡る初期的な開発事例として、わが国における「サナトリウム」と「林間学校」について検討している。

第二章「山林都市／一名林間都市」では、〈山林都市〉という言葉の生みの親である黒谷了太郎の経歴と『山林都市』の内容について詳述した後で、彼の著作活動の足跡を辿ることによって、その人物像と『山林都市』の位置づけについて論じている。

第三章「山林都市」の想像力」では、黒谷了太郎の『山林都市』に関する反響について検討し、その実現を名古屋の東部丘陵地開発に見た後で、戦前期における小田原急行鉄道(株)による「林間都市計画」(一九二九)、B・タウトによる「生駒山嶺小都市計画」(一九三三)、小林一三による「森林公園式都会」(一九三六)からなる実例について詳述している。

第四章「山林都市」の構想力」では、わが国における戦後の〈山林〉に関する開発を、「住宅地」と「別荘地」を巡る〈山林都市〉として列挙することによって、その足跡を辿っている。「住宅地」については、西山卯三による「山岳都市」(一九四六)、菊竹清訓による「森林都市基本構想 Forest City」(一九六八)「山林都市構想」(一九七二)、「森林都市」の開発原理―TYT計画基本構想への指針―(一九七二)、南海電鉄による「南海橋本林間田園都市」(一九七六)、「別荘地」については、丹下健三による「磐梯猪苗代自由時間都市」(一九六六、一九七一)、菊竹清訓による「パサディナ・ハイツ」(一九七四)、山下和正の「山林都市「川内高原」開発計画」(一九九〇、一九九四)等を取り上げて、各計画の内容について詳述するとともに、それらの背景にと

なった事象について検討している。

第V章「山林都市」のデザイン」では、黒谷了太郎によって創出された『山林都市』の特徴を、〈山林都市〉の遺伝子としてまとめる一方で、〈山林都市〉のデザインを「斜面」と「緑地」という観点において論じている。

これらの章構成は、第二章の黒谷による「山林都市」を中心に、第一章の黒谷以前の〈山林都市〉の背景となる内容について、第三章と第四章の黒谷以降の〈山林都市〉に大別できる。いずれの章においても、個別の計画におけるデザイン上の理念と実践を明らかにするように努めている。なお、第五章は、終章として総括するものであるとともに、多分に〈山林都市〉の今後のあり方について論じている。

われわれは、黒谷が見出した〈山林都市〉という「ユートピア」をいまだに探し続けている。〈山林都市〉は、どのような背景の中から出現し、その遺伝子はこれまでどのように受け継がれ、今日の都市デザインのどこに潜んでいるのだろうか。本書によって、その全容が俯瞰できれば幸いである。

【参考文献および図版出典】

- 1 丹下健三、川添登、渡辺義雄『伊勢…日本建築の原形』(朝日新聞社一九六二年二月)
- 2 丹下健三『人間と建築…デザインおぼえがき』(彰国社一九七〇年九月／二〇一一年一月)
- 3 川添登『メタボリズム1960』(美術出版社一九六〇年七月／二〇一一年一〇月)
- 4 丹下健三研究室編『東京計画1960…その構造改革の提案』(丹下健三研究室一九六一年三月)
- 5 Reynier Banham, *Design by Choice*, London, 1981(岸和郎訳『建築とポップカルチャー』(鹿島出版会一九八三年))
- 6 秋本馨『現代建築のコンテクスチュアリズム入門…環境の中の建築／環境をつくる建築』(彰国社二〇〇二年四月)
- 7 八束はじめ編『建築の文脈…都市の文脈…現代を動かす新たな潮流』(彰国社一九七九年二月)
- 8 Robert A. M. Stern, *New Directions in American Architecture*, London, 1969
- 9 伊藤てくてく『華麗なるいかり伝説論』(『建築文化』Vol.17, No.187 彰国社一九六二年五月)
- 10 James J. Gibson, *Visual World*, Cambridge, 1950

第Ⅰ章 〈山林都市〉前史 13

第一節 〈山谷〉の美学 14

- 〈山谷〉の発見
- ラスキンとヴィオレ・ル・デュクによるアルプスの描写
- 「アルプス建築」という「山岳都市」

第二節 〈林相〉の美学 21

- 近代林業の成立と「森林美」
- 「雑木林」の発見
- 「サナトリウム」の建築
- 「休暇集落」と「林間学校」
- 「海水浴」から「森林浴」へ
- 「日光」と「大気」
- モダンデザインの源泉としての〈山林都市〉

第Ⅱ章 山林都市／一名林間都市 37

第一節 都市計画家 黒谷了太郎 38

第二節 「山林都市」の特徴 40

- 山林都市、山林都市計画、林間都市—Forest City—
- 「山林都市」Ⅱ「山岳都市」+「田園都市」
- 「山林都市」と「田園都市」
- 「山林都市」の内容

- 「山林都市」の空間デザイン…〈山谷〉と〈林相〉のデザイン

第三節 黒谷了太郎による「山林都市」以外の著作について 52

- 都市計画に関する著作
- 都市計画に関する翻訳
- 台湾に関する著作

第四節 黒谷了太郎による「山林都市」の位置づけ 74

- 「和魂洋才」と「洋魂洋才」の間
- ゼネラリストとしての都市計画家

第Ⅲ章 〈山林都市〉の想像力 79

第一節 都市計画愛知地方委員会による整地事業 80

- 『山林都市』に対する反響
- 「八事耕地整理組合」(一九二四)と「南山耕地整理組合」(一九二四)

第二節 小田原急行鉄道(株)による「林間都市計画」(一九二九) 85

- 利光鶴松の構想
- 「スポーツ都市」
- 「林間」というイメージ
- 「建蔽率」という錬金術

第三節 B・タウトによる「生駒山嶺小都市計画」(一九三三) 91

- 生駒山の「アルプス建築」
- 大軌の住宅地開発

第四節 小林二三による「森林公園式都会」(一九三六) 96

第Ⅳ章 〈山林都市〉の構想力 101

第一節 住宅地としての〈山林都市〉 102

- 西山卯三「山岳都市」(一九四六)
 - 「ニュータウン」の造成と緑地
 - 菊竹清訓「森林都市基本構想 Forest City」(一九六八)、「山林都市構想」(一九七二)、「森林都市」の開発原理・T Y T 計画基本構想への指針」(一九七二)
 - 「ヒル・ハウジング」
 - 南海電鉄「南海橋本林間田園都市」(一九七六)
- ### 第二節 別荘地としての〈山林都市〉 118
- 「開発」と「保全」の間に宙吊られた〈山林〉
 - 「森林鉄道」から「スーパー林道」へ
 - 山岳スポーツの大衆化と「山小屋」の建築
 - 21世紀の日本における日本の国土と国民生活の未来像の設計」
 - 丹下健三「磐梯猪苗代自由時間都市」(一九六六、一九七二)
 - 菊竹清訓「パサディナ・ハイツ」(一九七四)
 - 山下和正「山林都市「川内高原」開発計画」(一九九〇、一九九四)

第Ⅴ章 〈山林都市〉のデザイン 137

第一節 「斜面」のデザイン 138

- アノニマスな建築における断面のデザイン
- 「斜面」における思考実験
- 「階段」としての建築
- 「斜床」としての建築

- 擁壁のデザイン
- 批判的地域主義 (Critical Regionalism)

第二節 「緑地」のデザイン 146

- 「低密度」のデザイン
- 「輪郭」のデザイン

第三節 〈山林都市〉の遺伝子 148

- 「ポリス的動物」のための都市計画
- プロフェッショナルリズムの行方

おわりに 154

巻末表 1	黒谷了太郎年譜	173
巻末表 2	黒谷了太郎による著作一覧	172
巻末表 3	明治末年から昭和初年のわが国における田園都市の紹介と 日本型田園都市に関する主な論考	159
巻末資料 1	論文「山林都市計画」 1	169
巻末資料 2	論文「山林都市計画」 2	166
巻末資料 3	論文「山林都市計画」 3	163
巻末図	黒谷了太郎による「山林都市」の候補地	160

た本書第I章において、「林間学校」の誕生をシャルロテンブルクとした、ドクトル・ペンラックスによる「シャーロットテンブルヒ林間学校に就て」という論文を翻訳したのが、三矢宮松であった(註215)。その後、東洋拓殖(株)(一九三〇年十一月)を経て、再び台湾へ渡り、台湾総督府殖産局特産課嘱託(一九三一年七月―一九三七年六月)に務めたが、終生慕った宮尾舜治が亡くなったとき、彼の伝記『宮尾舜治伝』(一九三九年)を編むために職を辞した(註216)。上梓した後で、昭和一五(一九四〇)年より台中州知事官房文書課嘱託、台湾総督府企画部企画課・同総務局総務課・鉱工局工業課等を歴任したが、昭和二〇(一九四五)年五月に台北で鬼籍に入った。

第二節 「山林都市」の特徴

黒谷の「山林都市」は、わが国の約三分の二を占める「山林」を利用し、当時の最先端の都市モデルであった「田園都市」に代わる「ユートピア」として構想された。明治末期から大正期を通じて、多くの「日本型田園都市」が構想されたが、「田園」を「山林」と読み替えたのは黒谷一人であり、極めてユニークな着眼点であった。黒谷の「山林都市」が目指したのは、山林を水源とする水力発電によって工業を興し、地形を巧みに利用した用途地域が敷かれ、電気自動車が行来する人工美と自然美が調和した「小都市」であった。一世紀近く前にわが国の一官吏が著した素朴な夢は、「コンパクト・シティ」に代表される現在の規範となる都市モデルと大差ない先駆的な構想であった。

政府機関に奉職する傍らで、黒谷は、一官吏の身分と仕事の枠を超え出た量の著作を残した【巻末表2】。ここでは、彼の主著となる『山林都市』について検証し、それ以外の主要な著述については後述することにした。まずは、その発表経緯を追いかけて、〈山林都市〉の成立過程を見てみたいと思う。

●山林都市、山林都市計画、林間都市―Forest City―

黒谷了太郎の『山林都市』は、大正一〇(一九二一)年から昭和三(一九二八)年までに、「山林都市」「山林都市計画」「林間都市―Forest City―」という三つの名称で発表された。これらは、少しずつ内容が異なるため、

彼による『山林都市』の構想は、これら三つからなる著作の総意として考えられるべきものであろう。 「山林都市」が、最初に発表されたのは、台湾総督府によって台湾事情や南支南洋地域の状況を周知する目的で発行されていた雑誌『台湾時報』の大正一〇(一九二一)年一〇月五日付の記事であった。この雑誌の読者は限定されていたため、内地にいる国民の目に留まるのは、ほぼ同時期に発表された『新愛知』という地方新聞紙上で同月七日より九日までの三日間にわたって掲載された記事であった。翌大正一一(一九二二)年には、「都市計画名古屋地方委員会内青年都市研究会」によって全四八頁からなる小冊子として発行された。このとき、本文に先立って全一〇項目からなる「大意」が、追加された。その後、大正一二(一九二三)年の『産業時報』では、第三巻第一号と第二号の二回に分けて、大正一三(一九二四)年の『土木建築雑誌』では、第三巻第一号から第三号までの三回に分けて、それぞれ掲載された。このとき、特に後者の雑誌に掲載された論文だけは、「山林都市計画」というタイトルで発表されている。この内容は、大正一五(一九二六)年の『内務時報』の第三三二号から第三三四号までの三回分に引き継がれたが、同年の『都市創作』では、第二巻第二号から第六号までの五回に分けて掲載された際に、内容の修正が行われた。最大の変更点は、先述した「大意」が、第九項目と第一〇項目の二項目が挿入されて全一二項目となったことであるが、この「大意」の詳細については、後述する。最終的には、昭和三(一九二八)年二月に、曠台社より全八九頁からなる単著として出版された【図2】。大正一一年版の小冊子に付された序文と、全一二項目からなる「大意」の他に、「パーカー及アンウキン氏の設計したレッチラーズの都市計画図」「レッチラーズの田園都市計画全図」「レッチラーズの商業地」「レッチラーズの労働者住宅」「エルキンの田園都市計画図」「エルキンの地域性」「エルキンの住居地域設計の一例」「エルキンのブロックス・ウッド小路」からなる八枚の図版が掲載された。

●「山林都市」=「山岳都市」+「田園都市」

黒谷は、台湾総督府に勤務していた明治三二―三三(一八九九―一九〇〇)年頃に、イギリスが一九世紀にインドにおいて避暑地として開発したシムラ(Simla)・ナニताल(Nani Tal)・ダージリン(Darjiling)・ムスソリー(Mussoorie)・マリー(Muree)などの列強各国の熱帯植民地のサナトリウムやサマータウンのことを聞き及んで、台湾における「山上都市」あるいは「山岳都市」という着想に至ったと述べている(註217)。さらにその

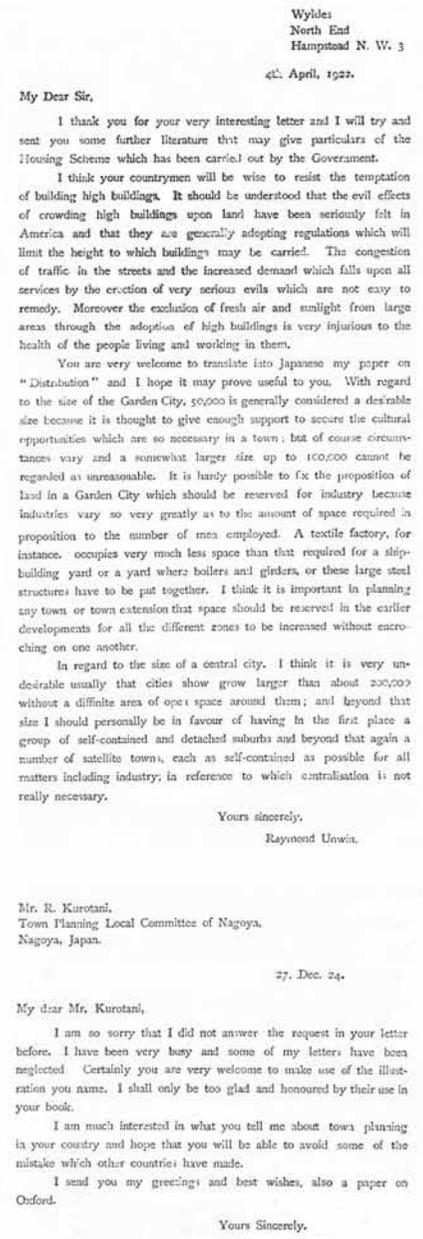
註215 後掲脚注【註2140】および第I章脚註【註1165】参照。

註216 参考文献4参照。

【図2】『山林都市―Forest City―』(曠台社一九二八年)表紙(筆者蔵)



註217 参考文献5、p.p.10-26参照。



後、都市計画愛知地方委員会に勤務していた頃に、R・アンウィン(Raymond Unwin, 1863-1940)やC・B・パードム(Charles Benjamin Purdom, 1883-1965)との書簡をやり取りし学んだ「田園都市」に関する理論と【図3】、この「山岳都市」が結合した理論が「山林都市」であった。このような経緯から、黒谷の「山林都市」は、「田園都市の精神に基づいて、山間または林間に建設せられる一つの理想都市」となったのである。「山岳都市」と「山林都市」は、大きく異なる。両者は山間部を居住地として開発しようとした点において共通していたが、前者は、熱帯地方における山岳地帯の高度差を利用して良好な環境を目指した結果であり、「公衆衛生」上の事由によるものである。対する後者は、山林を利用する産業を基盤に据えた、「理想都市」としての性格を有するものである。

明治四〇(一九〇七)年に内務省地方局有志によつて『田園都市』が発行されて以来、わが国では数々の「日本型田園都市」の理論が開示された【巻末表3】。たとえば関一の「花園都市」(一九二二)や、大屋霊城の「花苑都市」(一九二六)などが挙げられるが、その多くが都市への人口集中による弊害を指摘し、法学や社会学的見地から社会改良を標榜する理念ばかりのものであった。これらに対して、黒谷の「山林都市」は、職住一体の理想郷を提示しており、E・ハワード(Ebenzer Howard, 1850-1928)の「田園都市」の本質を、当時としては最もよく理解していただけでなく、アンウィン仕込みの実際の都市空間に関するより具体的な提案が盛り込まれていた。この時期の「田園都市」の解釈を考える上で、最も重要なことは、黒谷を除くすべての人物が、「Garden City」をこかに理解して「Garden」をいかに翻訳するかということに終始していたのに対して、黒谷だけが、「山林」に翻案することができたということである。「Garden」の訳語が、「田園」に落ち着くまでの言葉は、実にさまざまであった。「花園」「家苑」「菜園」「農園」「園囿」……どの言葉も「Garden City」に対する解釈の表象であった。しかも、それらの多くは、西洋から輸入された思想を、古典中国語の語彙に置き換えるという明治時代に特有の翻訳方法であった(註2-8)。明治三八(一九〇五)年に、夏目漱石(一八六七—一九一六)が、「徳川時代は漢文が盛んであった。然し当時は支那が標準であった。(中略)支那人と同じやうなのか、若しくはそれ以下で決してそれ以上に出るといふことは出来なかつた。今の文学界も亦こんな(西洋本位の)様がある」(『戦後文界の趨勢』)と著したように、「和魂漢才」は「和魂洋才」に置換された。「Garden」の訳語もまた、漢語に置き換えられたが、漱石は、こうした「漢意」を非難したのである(註2-9)。黒谷の「山林」という言葉は、明らかに翻訳でなかった。翻案であった。R・アンウィンと文通し、彼の思想を当時のどの日本人よりも理解していた黒谷は、その概念を「田園都市」で良しとしなかつたのであろう。

●「山林都市」と「田園都市」

さて、黒谷の「山林都市」とは、一体どのような理論であつたのだろうか？ E・ハワードによる『田園都市』(一八九八／一九〇二)と比較してみると(註2-10)、一土地の公有制度について言及されている点、二工業を中心産業とした三〜五万人程度の「小都市」を目標としている点、三コミュニティのあり方について論じられている点、において影響が大きかつたと言える。しかしながら、これらはいずれも同時代における「日本型田園都市」にも見られる内容であり、「山林都市」の空間的特徴であるとは言い難い。また、R・アンウィンによる『実践の都市計画』(一九〇九)と比較して考えれば(註2-11)、一参照する都市事例が共通する点、二道路のデザインを中心とした都市の美観について論じられている点、において、その影響を受けていることが見て取れ

【図3】R・アンウィンから黒谷に太郎への書簡(1922年4月4日付および1924年2月7日付)
黒谷によれば、大正九(一九二〇)年頃、「名古屋を近代的に計画するには、欧米の諸大家の助力を求むる必要があると思ひ、約6か国の斯界の協会長に其の旨を依頼した所、独逸其の他の3か国の協会からは何等の返事がなく、白耳義の協会からは国書を送つてくれたに過ぎなかつたが、レィモンド・アンキン氏からは、……非常に親切なる手紙や印刷物を送つてくれ……間もなくレヂナルド・ダン氏を紹介してくれた」という。R・ダン(Reginald Dunn, 1883-1939)は、1921年にインド・マドラスの都市計画行政官に任命され、アメリカを経由して来日、熊々名古屋に立寄つて都市計画上色々有益な助言を与えてくれた」という。

註2-8 加藤周一によれば、明治社会は、西洋から輸入された新しい概念を「音写して日本文化の中に取り入れようとはせず、ほとんどすべて漢字の組み合わせによつて翻訳した」とした上で、こうした「徹底した翻訳主義」は、次の四つに分けられると言ふ。①蘭学者の訳語の借用、②中国語訳からの借用、③古典中国語の語彙の転用、④新造語、である。参考文献6参照。

註2-9 参考文献7参照。なお、ニューヨーク郊外のクイーンズ地区に「フォレスト・ヒルズ・ガーデンズ(Forest Hills Gardens)」という郊外住宅地がある。ラッセル・セイジ財団の出資を基に、一九〇九年からF・L・オルムステッド Jr.(Frederick Law Olmsted Jr, 1870-1957)とグロツナー・アターバリー(Grosvenor Atterbury, 1869-1956)によつて設計されたアメリカにおける「田園都市」の一例である。名称が関連するように思われる上、黒谷の『山林都市』に先行するが、接点が見当たらない。参考文献8参照。

註2-10 参考文献9参照。

註2-11 参考文献10参照。

る。二点目については、大正三(一九一四)年に、前田松韻による「住宅経営について」という一連の論文の中ですでに紹介されていたが(註2-12)、内容紹介に止まっている。また同時代における「日本型田園都市」を見ても、道路のデザインについて詳細に述べられた理論は見当たらない。

これに対し、次の三点については、「山林都市」の独自の理論であったことが指摘できる。それは、一「田園都市」における、「田園」を「山林」に代替している点、二水力発電による電気を主要なエネルギー源としている点、三主要交通を電気自動車としている点、である。これら三点からなる独自性は、いずれも「山林」を対象としたがゆえに構想することができたことは明らかである。

●「山林都市」の内容

さて、黒谷の「山林都市」には、内容の把握を容易にし、論理の構成を明確にするための章立てや見出しの類いはほとんどない。わずかに序と大意が書き分けられているが、そもそも目次がなく、ひとつの物語のように書かれている。しかしながら、注意深く読めば、黒谷の『山林都市』の内容は、(一)序と大意、(二)背景と概要、(三)地区計画、(四)街路計画と電気自動車、(五)コミュニティ計画、(六)計画候補地、という六項目に大別できることに気付くであろう。ここでは、これらの六項目に基づいて「山林都市」の内容について検討したいと思う

【巻末資料参照】。

(一)序と大意

序文の冒頭で、「此の山林都市一名林間都市は、都市と工業とを、生活と生産とを、研究して居る私の「ユーロピヤ」である」と述べていることからわかるように、トマス・モア(Thomas More, 1478-1535)による同名の小説を念頭に書かれたことが推察できる(註2-13)。このことは、前述したようにそもそも目次がないことを考えれば想像に難くないが、『山林都市』以外の黒谷の著書では、いずれも詳細な章立てと見出しが設けられていることから、この本の物語としての性格が重視されたと判断できるであろう。一方で、この序文については、後に『都市創作』誌上に発表された論文では、次の二点からなる大意が記載され、最終版では、序と本文の間に別章として挿入された。このことからわかるように、この書き出し部分には、黒谷が腐心した跡がうかがえ

る。「山林都市」の大意としてまとめられた一二項目は、次の通りである。

- 一、都市集中は社会上の弊害を醸成すること。
- 二、都市集中は都市自身の為のみならず国家の爲め、甚だ不利益なること。
- 三、都市集中に基く都市内の弊害を除去するは、近代的都市計画の精神であらうけれども、我国に於ては之れが頗る困難なること。
- 四、英国に於ては都市救済の根本策として都市集中に反対し、田園都市を作りて人口の分散を企てつゝあること。
- 五、我国に於ても都市生活を有意義ならしめんが為めには、都市集中を避け、別に新しき町即ち新理想都市を築造せざるべからざること。
- 六、然も日本に於ては土地高価なるを以て、英国に於けるが如く田園都市を築造する能はざること。
- 七、我国に於ては山林を利用し、田園都市の代りに、山林都市を建設せざるべからざること。
- 八、山林都市は、田園都市の精神に基き、工業を中心として市街を建設し、市民をして衛生的に、文化的に生活せしむるものなること。
- 九、山林都市はロマンテイシズムに従ひ、築庭的に計画せられ、人工美と自然美とを好く調和せしむるものなること。

一〇、山林都市は田園都市よりも、より多く大自然に接近せしむるなるを以て、大都市の不自然なる唯物的闘争生活から離れて、万物共存の自然的共同生活に復帰せしむるものなること。

一一、山林都市は都市の文化設備と天然自然の美観とを併せ有するものなるを以て、市民は楽しく働きて、美しく生活するを得、従つて能率は増進し、精神は安定し、労働争議は之れなきこと。

一二、故に社会改良家及科学的工業経営家は、是非とも山林都市の建設に努力すべきこと。

これらを読むと、次の四つの内容によって構成されていることがわかる。まず一番目から四番目までは、英国の「田園都市」に則った人口分散について言及されており、次に五番目から七番目までは、日本においても「田園都市」が必要であるが、「田園」ではなく「山林」であることが述べられている。そして八番目から十一番目までに書かれているのが、「山林都市」に独自の内容であり、最後の一二番目に、その実現支援者に宛てた言葉が添えられている。

註2-12 参考文献11参照。

註2-13 参考文献12参照。

(一) 背景と概要

本文の冒頭では、わが国における平均死亡率と犯罪件数から都市の現況分析に基づいた、人口の「都市集中」による弊害が述べられ、英国における社会改良家の仕事を紹介されている。R・オーウェン(Robert Owen, 1771-1858)´J・S・バッキンガム(James Silk Buckingham, 1786-1855)´A・A・シヤンプベリー(Anthony Ashley-Cooper Shaftesbury, 1801-1885)´E・チャドウィック卿(Sir Edwin Chadwick, 1800-1890)の名前が挙げられ、彼らの仕事はE・ハワードの『明日の田園都市』に結ばれている。さらに続けて、工場を有するユートピアを構想したR・オーエンとJ・S・バッキンガムが取り上げられ、G・キャドバリー(George Cadbury, 1839-1922)によるチョコレート工場を中心としたボーンヴィル(Bournville)や、W・H・リーヴァ(William Hesketh Lever, 1851-1925)による石鹸工場を中心としたポートサンライト(Port Sunlight)について言及されている点は、「山林都市」が工場を中心とした自立した都市であることを表明する上で重要な意味を持つ。同時にまた、英国における「公衆衛生法」(一八四八)を確立したE・チャドウィック卿の仕事について紙面が割かれ、英国の都市計画が「米国とは異なって社会改良家の精神に基づいて」培われてきたことが記されている。しかしながら、こうした論調は、明治四〇(一九〇七)年に内務省地方局有志によって『田園都市』が著されて以来、「日本型田園都市」全般に見出すことのできるものであり、決して目新しいものではない(註2-14)。

この後には、当然のように、人口の分散と、土地の公有に関する文章が続けられている。両者ともに『田園都市』の本質であると同時に、「山林都市」の基本的な考え方となったが、これらもまた、同様に「日本型田園都市」の域を超え出るものではなかった。より重要なことは、日英の地価と土地利用を具体的に比較した点である。すなわち、英国の郊外は、「地価が安い」上に「大方牧場」で都市建設にふさわしい場所が広がっているのに対して、日本では、「地価が安くはない」上に「集約的に耕されてゐる田地か畑地」であるというのである。言い換えれば、わが国の郊外に広がる田畑は、地価が高い上に、その所有形態が複雑であるということである。こうした日英の現状比較から、黒谷は、地価が安く、大地主が占有している場合が多いわが国の〈山林〉を見出したのである。

(三) 地区計画

「山林都市」が他の「日本型田園都市」と異なるのは、都市デザインに関する具体的な記述が用途別になされている点である。R・アンウィンによる『実践の都市計画』(一九〇九)と比較しても、都市空間の細部について具体的な表現がなされていることに驚く(註2-15)。

まず、山林を水源とした水力発電を行い、その電力によって電車とケーブルカーを走らせ、全体が「都市的中心」「商業地域」「工業地域」「住居地域」という四つの用途地区が用意されている。なお、ここで述べられている電車は、都市間交通としての移動手段であり、市内交通ではない。市内は、「総てが適當の歩行距離に配置」され、「日々工場に通ふにも事務所に行くにも一五分か二〇分位外気を呼吸して、歩いて行く」ことが想定されていた。

「都市的中心」は、四方から見える高所に設けられ、そこには市役所・市会議事堂・雨天には公園となる公会堂が建設され、谷間ごとに設けられた「副中心」には、市場や倶楽部の他にスケートリンクなどの室内運動場が建設される。その際、「都市的中心」と「副中心」を結ぶ主要道路沿いは、「商業地域」とすることも考えられるという。こうした「中心」の地区では、耐火構造の四階建ての建物が推奨されている。次に「商業地域」は、この「都市的中心」から電車の停車場へ至る街路沿いに設けられ、市域全面積の一〇〇分の一に満たない小規模なものにするように説かれている。そこには一階が消費組合の経営する商店、二階以上が事務所となる建物によって用途の混合が提案され、劇場や映画館が集められた娯楽施設も備えることが指摘されている。ここでも、耐火構造の建物が推奨されているが、高さは三階建てまでに抑えるように記されている。これに対して「工業地域」は、「山林都市」の都市経営の中心に据えられ、鉄道線路を挟んで商業施設と反対側に配置するように記され、工業の内容については、林産加工業はもとより、製糸業や精密機械工業を中心とした産業が提示されている。これらの工業は、社会改良家による「パターナリズム(Paternalism)」や、組合経営を中心とする「協働主義」に立脚した経営であるべきだと述べられている。最後に「住居地域」には、「地区に依りて一定面積に建築すべき家屋の一定数を定め家屋の大小、並に建築の体裁を整へねばならぬ」ことが記され、最低六〇坪以上、平均一〇〇坪とされる敷地は「建築面積の二倍を最小とし、三倍を標準」とするように建蔽率を指定している。ここでは、十分に取られた空地に、それぞれの庭園において花卉や野菜を造るよう奨励されているが、後の論文で

註2-14 参考文献13参照。

註2-15 参考文献10参照。

は、梅・桃・桜・紅葉などのさまざまな花園や、その土地に特徴的な自然の要素によって「周囲に四季の名所を設定すること」が主張される。さらにこのような敷地に建てられる住宅は、「山林都市」の経営者が「副業として建築業を営むか、特た特別の建物会社を立て、機械を以て」標準化された住宅を建設するように記されている。「住居地域」では、「商業地域」に隣接する建物については耐火構造が推奨されているが、その他に関しては、屋根以外は必ずしも耐火構造とする必要はなく、木造住宅の開放性と雰囲気推奨されている。また、住人については、一定の社会階層がまとまって住む必要があり、その中心に、図書館・博物館・芸術館・学校等の教育施設が建設され、「最も恰好な谷間を利用して」全市民が集まることのできる野外集会場・野外劇場・野外競技場を設けるように述べられている。

(四) 街路計画と電気自動車

さて、「山林都市」の街路は、「地形に基き其の高低に従つて」計画されなければならないとされ、「格子形(Gridiron Type)や碁盤目式(Chessboard Type)は(中略)山林都市に於ては絶対に禁物である」とされている。四つの地域計画を取り結ぶ道路は、「楓葉の葉脈状に計画」することによって、地形の高低に従つた街路とすることが求められる。「市街地の外郭に在る山林地帯」に、都市全体を周遊できる「内輪と外輪」からなる二重の「輪環街路」が必要であることが説かれている。具体的な事例として、「加奈陀(カナダ)のプリンスルーパート(Prince Rupert)」「デンバーヴキレッジ(Denver Village)」「那威(ノルウェー)のハマル(Hamar)」が挙げられているが、これらはいずれもR・アンウィンによる『実践の都市計画』の影響であった(註2-16)。さらにまた、街路幅員と「プロット(Plot)」すなわち区画の関係についても、幅員が広い街路には大きな区画を、狭い街路には小さい区画を割り付けるようにして、「整格(コーディネートション)」の必要が述べられている。

ところで、「山林都市」における市内交通は、基本的に「施設の」配置は悉く適当の歩行距離の範囲内に於てするを原則」とされたが、こうした道路上を走るのは電気自動車であり、路面電車の類は一切走らないものとされている。電気自動車については、「燃料節約上我国に於て最も必要であるのみならず、山林都市には最も適当なもの」であるという。電気自動車に関する記述は、意外に思われるが、黎明期にあった自動車の駆動方式は、石油と電気の間で揺れていた上(註2-17)、「斜面」に関して言えば、自動車のほうが路面電車よりも移動の自由

度が高いことも事実であろう。黒谷は、「山林都市」における地形の高低差を克服するため、ケーブルカーの導入を考えたし、都市間の移動には当然、電車が想定されていた。しかしながら、路面電車は、「不経済」で「危険物」としている。都市が「不経済」な路面電車を必要とするのは、「都市の不秩序」の証しであると言い、それは「衝突」と「病気伝染」の可能性がある「危険物」だと言うのである。路面電車との「衝突」については、本格的な自動車社会が到来する以前のこと、自動車が同様あるいはそれ以上に「危険物」となるとは考えなかつたのであろう。

(五) コミュニティ計画

コミュニティに関する記述は、「山林都市計画」等の初期の版では掲載されておらず、後の版で加筆された部分である。「山林都市」は、地方制度によって公共団体として認められているだけの「寄合世帯」にならないように、「共同生活を意識した親交団体」であるべきだとされている。

「山林都市」のコミュニティは、「隣保組織」と「自治組織」から構成されている。「隣保組織」については、「町」あるいは「区」が単なる物理的な行政単位ではなく、「親交団体」としての自治的性格が与えられるべきだとされている。具体的には、一〇〇戸を単位として「町内組合」を作り、一〇〇戸＝一〇町を一区とする小学校区を形成するように記されている。想定人口が約五万人に対して想定戸数は約一万戸であったから、「山林都市」全体としては、一〇校＝一〇区からなる小学校区が想定されていた。こうした人口単位は、本人の言に従えば、英国の「ソーク(Soke)とかワード(Ward)とかハンドレッド(Hundred)と称するもの」あるいは「プレシメント(Precinct)」が参考にされたというが、大正一三(一九二四)年にC・A・ペリー(Clarence Arthur Perry, 1872-1944)によって著された『近隣住区論(The Neighborhood Unit)』における「小学校当たり五〇〇〇人とする数値と同じであることから(註2-18)、「山林都市」の版が重ねられる中で参考にされたと考えられる。このことは、各住宅の裏庭を利用して、幼児のための最小単位となる運動場を作ること、隣保中心(Neighborhood Center)」を形成するという記述からもペリーの影響があったと考えられる。

一方、「自治組織」については、「直系的(ヴァーティカル)」である市役所組織を、「計画的職分」と「実行的職分」に大別する必要があるとしている。「計画的職分」とは、「人事、記録、財政、出納、法制に関すること」

註2-16 参考文献10参照。

註2-17 黎明期における自動車の駆動エネルギーは、ガソリンと電気で競合された。イギリスでは、一八九七年に「ロンドン電気乗合自動車会社」が設立され、アメリカでは、一九〇〇年に「エレクトリック・ヴァイクル社(Tratton)」が電気自動車「コロンビア」を生産しており、電気自動車の商業的利用が考えられるに至った。しかしながら、蓄電池の交換と充電一回当たりの走行距離(五〇マイル程度)のために、一九二〇年代になると電気自動車の生産と使用は減少し姿を消すことになった。参考文献14、15参照。

註2-18 参考文献16参照。